

金沢城を中心とする化政・天保期の医療と蘭学医

池田 仁子

はじめに

加賀藩の医者については、これまで疾病史の立場から、或いは蘭学史などから論じられてきた⁽¹⁾。また、筆者はこれまで、藩老の横山家や町家の宮竹屋、瑞泉寺等における医療と医者、或いは儒者金子鶴村との関わりの中で諸相をみてきた⁽²⁾。また、藩医を中心に近年は、「寛文七年金沢図」・「延宝金沢図」（ともに石川県立図書館蔵）に記載された者の解説を行い居住位置を確認し、さらに、近世前期・中期の各時期の侍帳に登載された医者の検索および、金沢城内での診療や医者の役割、諸活動について、それぞれ考察した⁽³⁾。

こうした中でわかったことは以下の通りである。①藩医らは金沢城の惣構の内側、またはこれに近い位置に屋敷を拝領し、また、藩士全体に占める藩医の割合は、1～2%程であり、彼らは藩主前田家や藩士らの医療に当たった。②城内の金谷出丸が前田家の居住空間として機能し始めたのは、貞享4年頃（1687）ころからであり、その後の藩医らの医療場所は、主に二ノ丸と金谷出丸であった。③藩主前田家の医療には、藩医のほか、重臣御抱えの家中医及び町医者のほか、医療・学問の中心地、京都からも医療スタッフとして招請された医者が担当した。④江戸藩邸での前田家の医療には、江戸の町医者なども加わる場合もあり、こうした江戸や京都の医者がのちに藩医として召抱えられる場合も珍しくなかった。⑤藩医は近世前期に出仕した医家が中期にも存続している場合も少なくないが、一方で中期に新たに採用された医家もかなり多かった。⑥町医者も屋敷を拝領する場合もあり、藩の施設に勤務して日常的に病人の治療に当たったり、臨時的に郡内の疫病治療に派遣される場合もあったことなどを確認した。

引き続き、前稿（[註]（3）（c）を以下略記）で最後に取り扱った天明3年（1783）の侍帳を基調として近世後期についてみると、金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵の各侍帳類、すなわち、文化元年（1804）頃の「金藩分限録」での医者数は39人程、同4（1807）年「加陽武将」では32人程、同4年～11年（1814）の「帳秘藩臣録」では54人程、弘化元年（1844）「士帳」では50人程にのぼる。かつ前期・中期・後期の近世全体を通した医家の総数はおよそ延べ81件ほどが確認される。この近世後期の医家81件のうち前期より医家として存続している家は13件ほど有り、これは総医家における1割6分ほどに当たることが分かった。また、近世中期に新たに採用され、後期まで存続する医家が多かったことが確認できる。さらに後期の各侍帳における医者の記載数は、藩士全体の2～3%ほどであり、近世前期・中期における1～2%よりやや多くなっている。この点では、前田家或いは藩政における医療面がやや充実化されたとも解釈できる。これらについての詳細は別稿に譲ることとしたい。

本稿では、近世後期における医者のうち、主に金沢城を中心とする化政・天保期（1804～44）頃の医療と蘭学医について考察したい。第一に、金谷御殿における隠居した11代藩主前田治脩、二ノ丸御殿での12代藩主斉広の実母貞琳院の治療、竹沢御殿での斉広の治療、金谷御殿での斉広の男子延之助の治療について、次に前田家の蘭書と13代斉泰の治療というように、前田家の医療における蘭学医らについて素描する。第二に、金沢城修築における作業員の病気・怪我の治療、さらに疫病の流行と医者への派遣という面から、領民の治療に当たった蘭学医らの活動を垣間見る。全体を通して、基礎的な考察の積み重ねこそが重要と考え、どういう医者がどのような医療に携わったかという、一つ一つの事例を中心にみていく。従来、著名な蘭学者と藩主前田家の医療でしか論じられなかったが、ここで

は、広く蘭学修学者に目を向け、かつ領民の医療にも関わる点にも留意しつつ、蘭学医らの役割・位置、新医方、蘭方医術の導入などにも触れていきたい。

なお、例えば金沢市立玉川図書館加越能文庫「政隣記」（文化7年7月27日）に「蘭学医」と見え、また、同「官私随筆」（天保13年6月21日）には「蘭医」と記されるなど、蘭学医・蘭医は史料用語・歴史用語である。本稿では、京都・江戸など漢蘭折衷医も含め、いわゆる著名な医者・蘭学者に師事し、蘭学を修得した加賀藩領内の医者、或いは蘭医方に関わった医者を蘭学医と称することとする。こうした医者は広い意味では近代の西洋医学につながるものとする⁽⁴⁾。

一、金沢城内における藩主前田家の診療と蘭学医の登用

(1) 金谷御殿での前田治脩の診療と医者

金谷御殿における隠居した11代藩主前田治脩の診療と医者の動向などについて、「政隣記」より[表1]にまとめた⁽⁵⁾。

[表1] 前藩主前田治脩の診療と医者

年（西暦） [年齢]	月	日付 治脩の治療・逝去と医者の動向
文化4年（1807） [63歳]	2月	18日畑柳啓（禁裏御用医、京都町医者）、治脩の治療のため弟柳泰、弟子・家来ら50人にて京都より金沢菅波屋へ参着、2汁5菜の料理を拝領（翌日より旅宿にて取計、賄代柳啓は7匁5分、柳泰は5匁、若党弟子は3匁、小者2匁で賄う）。20日柳啓、金谷にて治脩拝診、薬差上げ、料理等拝領する。22日は同じ。24日診療、糸鱈鮓・酒拝領。25日登城、作法書の通り誘引され、御居間で齊広を診療。柳の間へ復座、藩医横井元秀相伴にて料理を拝領する。柳啓、治脩の医案を呈上。晦日翌日帰京に付、白銀100疋、生絹10疋、串海鼠1籠拝領、治脩よりも白銀50枚、鰯筋1籠内々にて拝領する。弟畑柳泰は帰京せず、其儘滞留し治脩治療を拝命。柳啓発足前旅用金150両を拝領する。
	3月	朔日畑柳啓京へ発出する。
	4月	朔日畑柳泰、前田治脩診療服薬により快方に付30人扶持下賜。横井元秀江戸より帰国次第（7日）帰京を拝命。9日白銀100枚、生絹10疋、串海鼠1籠拝領、治脩よりも白銀50枚、鰯筋1籠、内々金谷にて紋絹3端拝領。旅用金150両拝領。11日帰京する。
	11月	8日畑柳泰、治脩の治療のため上下18人にて京都より参着する。旅宿は金屋専次郎宅である。
文化5年（1808） [64歳]	正月	15日柳泰、城内火事と聞き、早速伺公し診療する。治脩は平生の如く色々物語有り。ともに鱈鮓召上る。
	2月	25日柳泰願により帰京する（勝手方より白銀100枚、治脩より50枚拝領）。
	3月	（28日藩主前田齊広帰国）
	5月	朔日畑柳泰、再来。茨（萩）野左衛門の例の通り旅宿へ参着。小者は残らず翌2日帰り、御殿参上の節の小者9人を貸渡す。2日柳泰持参の扇子1箱、楽焼茶具5品、薬草5鉢内献上。町同心が金谷へ取次ぐ。
	8月	16日故医学院法印企置の温公資治通鑑を父の志継ぎ出版する京都の医畑柳啓

		に白銀50枚を下賜すること、翌日帰京の畑柳泰へ申談する。17日願により柳泰帰京（前日16日金谷御殿で2汁7菜料理拝領、内々瀑布3疋、かすていら1箱、羊羹1箱、白銀20枚下賜。表向では金子70両并弟子柳榮へ旅用29両、合計90両拝領する〔文化4年11月8日～5年2月25日旅宿賄方等諸入用銀10貫236匁、5月朔日～8月16日まで312両及び旅用金70両、合計131両1歩拝領、京都出発前は旅用130両渡される〕）。
	9月	11日治脩診療のため津山藩藩医宇田川玄真招請の使者として大小将和田知左衛門に命ずる。12日右中止となる。但し京都の医師不参の場合は玄真招請予定のこと。
	12月	8日宇田川玄真金沢に到着（問番大地縫左衛門〈文宝、170石〉より津山藩家臣へ奉札にて手続きを行い、11月22日美作発足）、旅宿は堤町角屋太郎次方。召連従者は門人藤井方亭らである。10日玄真、金谷にて治脩を診療（御座所へ参上の節、虎之間の代りなど各部屋でもてなしを受ける）。
文化6年（1809） [65歳]	2月	9日玄真近日帰国につき、旅宿にて2汁6菜等料理拝領。給仕坊主挨拶等、賄方与力篠井元右衛門・村井九右衛門相談、町料理人に担当させる。10日玄真帰国する。
	4月	29日治脩様態同様、「御穩成」「追日暖相成」等につき畑柳泰一先京都へ御暇下さる旨が申渡される（5月11日帰京）。
	6月	22日治脩様態一進一退につき畑柳泰参上するよう飛脚を遣わす。
	7月	11日柳泰金沢に参着する（5日京を発出）。
	9月	14日宇田川玄真参着する。御貸家は角屋太郎次宅、従者は藤井方亭、若党兩人、小者9人である。
	10月	朔日玄真登城につき町奉行津田政隣ら参上する。町下代が玄真を誘引、表式台代り裏式台へ参上。御小将誘引にて虎之間代へ通し、問番挨拶。給事は御歩で、茶・たばこ盆出され、もてなしを受ける。
文化7年（1810） [66歳]	正月	4日治脩病状悪化、夕7時半御供揃にて齊広金谷に入殿、暫見舞い、一先帰り、再び暮6時過入殿、夜4時前帰る。御供断切る。医師中は昼夜詰る。柳泰・玄真も相詰め診療する。5日藩医横井元秀・内藤宗純・大石慶庵、長甲斐守家中医田中大玄、横山山城家中医津田随分齋、本多勘解由家中医三宅良雄、町医師三ヶ所御用勤の白崎玄水へ診療を仰付られる。齊広朝5時頃金谷へ入殿、4時前御帰り、治脩の様態少し快方。昼夜又急変する。8時半頃金谷へ入殿、暮6時半過御帰、御供断切りと命あり。翌6日年頭御札延引となる。年寄衆兩人詰切、半日半夜交替で勤める。6日治脩様態変化なし、齊広朝4時過金谷入殿、程なく二ノ丸へ帰り、再び9時入殿し、夜御詰切る。夜4時頃より急変する。7日治脩暁時重篤、昼8時頃指詰り、御逝去となる。8日治脩病氣指重に付、富山・大聖寺より医師1人宛招請のため宿申付る。公儀御医師招請願により、江戸へ早打御使発出する（17日幕府御医者河野良意江戸発出、20日落合新町にて御逝去を聞き帰府）。9日御逝去の早打御使江戸へ発出。藩内では9日辰ノ刻御逝去と触出す。15日治脩病問うため江戸より佐々正益ら金沢に到着する。16日治脩中陰法事、玉泉寺施行米につき過ち人（怪我人）に備え、非人小屋勤めの本道・外科1人宛参上の事を申渡す。前日白井宗碩・白崎玄水、後日白井宗碩・高沢仙立出勤の旨達あり。26日宇田川玄真御暇下され近日帰るに付、白銀200枚、染物10端下賜。別段内々100

		両拝領する（2月6日発足）。同日畑柳泰も近々帰京につき白銀150枚、染物10端拝領。別段内々100両、願書のうち小判90両受取る。
	2月	5日治脩葬儀、朝6時宝門寺にて執行。4時頃御発棺、8時過野田着棺する。棺火屋へ入れられ、宝門寺和尚が退去次第、お供の面々は引き、御医者・外科等は桃雲寺に相詰る。

前述のように藩主の治療のため、京都から医師を招請する例は、近世前期からみられ、例えば、前田利常には武田道安信重が、綱紀には津田寿軒などが、吉徳には辻祐庵の招請がある（前々稿く[註](3)(b)・前稿）。治脩の診療については、まず、金沢出身の漢蘭折衷医で典薬大允の荻野元凱（1737～1806）の事例を上げることが出来る。すなわち、「袖裏雑記」に「荻野典薬大允、去秋御国へ被為召、御容躰診察被仰付」と記され、『加賀藩史料』11編では「去秋」とは寛政6年（1794）に年次比定するが⁽⁶⁾、この時治脩は在江戸であるから、この年次比定は誤りである。一方、「政隣記」文化5年5月1日条に、畑柳泰の金沢再来に関連して（[表1]）、「荻(荻)野左衛門例之通於旅宿参着」と見える。これについて、荻野は寛政6年典薬大允に昇進するが、それより以前安永4年（1775）左衛門大尉に任ぜられている。この間寛政4年9月に治脩が在江戸の時、荻野は金沢へ下向し、佐渡守（重教の子斉敬）を診療し、30人扶持を給されている（「袖裏雑記」）。このように考えると、荻野の金沢来訪、治脩診療の時期は、少なくとも安永4年から寛政5年の間ということになる（この間、治脩が秋に在国しているのは13年間程）。禁裏で活躍している金沢出身の荻野が、藩主家の治療のため、当地に複数回招請されることは充分首肯できることである。ともあれ、荻野による「袖裏雑記」記載の治脩の診断は「勤労之疾、神気不和、抑鬱」の状態であった。すなわち、過労による発熱と気分の落ち込みなどに対し医薬を処方している。治脩は享和2年（1802）に隠居するが、この時、藩主在職の時であったので、治脩の治療場所は二ノ丸であったことはいうまでもない。

因みに、荻野は初め前田土佐守家中医荻野正立と称したともいい（「政隣記」16巻）、上記ののちにも皇子を診療して尚薬（天皇、皇太子の侍医）、河内守に補任せられ、また、幕府にも召され医学館で瘟疫論を講じたほか、松江・高知・小倉・彦根など各藩の病用に応じ処方を呈出する一方、実験医学の先駆者で漢蘭折衷医の山脇東洋（1705～62）の第2子山脇東門（1734～82）の西洋刺絡の術を広め、宝暦13年（1763）に『刺絡編』を著した。すなわち、荻野も西洋医学、蘭学を修得していることがわかる。加えて、人体解剖も率先して行い、解剖史に名を残した。さらに、元凱を祖とする荻野家では安永9年～安政6年まで多くの弟子を育てたことが「荻野元凱門下姓名録」によって知ることができる。このうち、藩領内から55人ほどが入門しており、さらに、元凱の代の文化3年までの藩領内の入門者は34人ほどで多数を占める。この中には天明6年のに片山幸介（君平）、寛政3年の黒川元守（元亨）、同4年の三宅良雄、同12年の黒川元恒（後述）などのそれぞれの入門が確認できる⁽⁷⁾。

また、寛政4年金沢下向の帰京の折、町医師津田随分斎の倅も荻野に随行した入門者である（「政隣記」16巻）。この随分斎の倅は津田宇内・煥・随分斎とも称し、寛政4年9月6日「於金沢入門」している（「荻野元凱門下姓名録」）。なお、治脩は藩主在職中の寛政2年（1790）疱瘡に罹り、藩医の内藤宗安らの診療を受けている（「政隣記」15巻）。

かくして、[表1]でわかるように、文化4年2月18日には、京都より金沢に招請された「禁裏御番并御七」（禁裏御用医）・「京都町医」の畑柳啓（1756～1827）は、治脩の治療のため弟の柳泰（1771～1832、京都町医）や弟子・家来ら50人にて当地菅波屋へ参着する。2汁5菜の料理を拝領、翌日より

旅宿にて取計い、賄代については、柳啓は7匁5分、柳泰は5匁、若党・弟子は3匁、小者2匁で賄う。20日柳啓は金谷にて治脩を拝診、薬を差上げ、料理等拝領する。22日もほぼ同じであった。24日も診療、糸饅飩・酒を拝領する。25日登城し、作法書の通り誘引され、御居間で時の藩主斉広をも診療する。柳の間へ復座、藩医横井元秀の相伴にて料理を拝領。柳啓は治脩の医案を呈上する。晦日は翌日帰京に付、白銀100疋、生絹10疋、串海鼠1籠を拝領、治脩よりも白銀50枚、鰯筋1籠内々にて拝領する。しかし、弟畑柳泰は帰京せず、其儘滞留の上、治脩を治療するよう拝命する。柳啓は発足前に旅用金150両拝領し、3月朔日京へ発出する。

ところで、「続漸得雜記」（加越能文庫）により文化丁卯（4年）2月付の医案の内容は、治脩は「疝癖（腸や腰腹等の筋肉が引きつって痛む病）之証」で、動悸があり、やや軟便気味であるため、「九味（益智・木香・半夏・附子・呉茱・陳皮・青皮・乾姜・甘草）」と水2合を1合に煎じ取った薬を調進するというものであった。署名は「畑医学院法眼柳啓拝」と記されている。この医学院は、柳啓の父畑柳安（1721～1804、宮廷医官畑柳景の養子、黄山、儒医）が天明元年（1781）京都に創設したもので、ここでは2000余人という多くの門人を育てた。また、医師番付として最古といわれる寛政末から享和初め頃（1800年頃）の「新撰医師視立角觥会^{しんせんいしみたてすまふあはせ}」には、頭取として畑柳庵が、また、大関として先の荻野典薬大允が、前頭として畑柳敬（啓）の名がそれぞれ見え、さらに文政13年の「医家大相撲」番付表には、頭取として畑柳啓が、勸進元として畑柳泰の名が見え、また、「本朝方今海内医林伝」（文政11年序）には畑柳泰に関して「室町 内科 号橘洲、善詩及書」等と記されている。

以上のことから、宮廷医家の流れを汲む畑柳安・柳啓・柳泰は当時京都では著名な医者であったことがわかる⁽⁸⁾。なお、文化4年2月25日柳啓が登城した時の作法書では、大小将が柳啓を誘引し虎の間へ通し、町奉行が挨拶、給仕は御歩が勤め、茶・たばこ盆を出し、組頭が挨拶する。また、御小将の誘引にて柳之間二之間へ通す。御小将に誘引され、御居間で斉広を拝診する。かくして柳之間へ復座、藩医横井元秀の相伴にて料理が振舞われた。

続いて柳泰は再び同年11月より金沢に招請され、翌文化5年正月金沢城内の火事に遭遇する。この時治脩は「御平生」を保ち談話し、饅飩を3碗召上り、江戸ではこのようなことは「度々」あるといい、あまりの火の熾烈さに仰天し慌てふためいた柳泰をたしなめる逸話がある（「寢覚の蜚」）。結局金沢城二ノ丸は残らず焼失したが、金谷御殿は類焼を免れた。

ともあれ、翌5年2月に柳泰は帰京するが、また5月に再来し、8月まで滞在・治療に当たったものとみられる。なお、帰京に際し、故医学院法印である父柳安が企てていた「資治通鑑」（北宋の司馬光が撰した歴史書）の出版について、その遺志を継ぎたいという畑柳啓に白銀50枚を下賜することとし、翌日帰京する畑柳泰へ申談じている。

柳泰が帰京したあと、招請されたのが、美作津山藩医で蘭学者の宇田川玄真であった。すなわち、文化5年12月8日玄真は金沢に到着。旅宿は堤町の角屋太郎次方で、従者は門人の藤井方亭らであった。10日金谷にて治脩の診療を行なう。その日御座所へ参上の節、虎之間の代りなど各部屋でもてなしを受ける。治療・処方などについて、「政隣記」からみると次のようであった。治脩の治療では、それまでの「補劑」では本復せず、急症も計りがたく、「石膏」等の瀉劑を処方すると、回復に向ったとの上申あり。是までの畑柳泰の御療治は、「附子」（トリカブトの塊根や子根を乾燥させた漢方の生薬。興奮・鎮痛・代謝亢進に使用）等の補劑を処方しており、「表裏」（玄真とは反対）の診案につき、「御家中医」・町医数十人の診案は区々だが、玄真と同様の見立ての者も多く、御言舌・御気色も余程快然したという。そして、玄真の医流は「紅毛流」にて、薬種は細末・煎湯で、味は「多分辛」きものであったという。ここでは、「御家中医」というのが史料用語であり、当時使用されて

いた歴史用語であることが改めて確認できる。また、上記各部屋の「代り」とは、大火による焼失の城内が御普請中であるため、代わりの藩老本多安房邸を城内の各部屋とほぼ同様にし立て、藩外の医者などを同じように応接したものとみられる。

かくして文化6年2月には、玄真が帰国し、同年4月に畑柳泰が診療しているゆえ、再び柳泰はこの時までに金沢に来ていたが、5月には帰京する。この間、二ノ丸の造営は徐々に出来上がり、同年4月齊広は二ノ丸に引移る。7月には柳泰が再来し、金谷御殿で治脩の診療に当たる。10月には玄真も再来し、ともに治脩の診療に当たった。こうして、文化6年10月朔日玄真が登城するのに際し、町奉行の津田政隣らは二ノ丸御殿へ揃って参上し、町下代が玄真を誘引し、まだ造営中であつた表式台の代わりの裏式台へ参上する。引続き御小將の誘引にて虎ノ間代りへ通し、聞番が挨拶する。給事は御歩で、茶・たばこ盆を出す。組頭も参上して挨拶し、御小將が誘引、柳ノ間三ノ間へ通し、組頭、年寄中が挨拶する。柳ノ間縁先へ手水桶・手拭を懸置くよう準備がなされた。玄真は横目指引にて檜垣ノ間へ御出、御目見披露、定番頭以下御歩頭以上が伺公し、奏者番の勤めにより御意有り、御用番が取合申上げ、退去する。柳ノ間三ノ間にて料理を下賜、給仕は御歩が、また、指引は小頭が勤め、組合頭が参上し挨拶する。相伴は藩医が勤め、聞番も参上、挨拶する。横目が指引し、役人は布上下を着用。玄真の退出時は組頭の挨拶があり、取次は御小將で、式台階上まで案内した。

このように、宇田川玄真のほか治脩の治療に当たったのは、少なくとも藩医では横井元秀・内藤宗純・大石慶庵、長甲斐守の家中医田中大玄（初め町医者、寛政6年〈1794〉長家に10人扶持で出仕、のち120石、前田家の御用医も勤める、文政8年没、その後裔は幕末期種痘所の設置に尽力）、横山山城守の家中医の津田随分斎（養。嫡子も随分斎と称し、荻野元凱の門下で〈前述〉横山隆貴・隆平の出産担当医、安政2年金沢堤町種痘所設立、文久3年牛痘伝苗などに尽力）⁽⁹⁾、本多勘解由の家中医の三宅良雄（蘭学者小石元瑞に入門）⁽¹⁰⁾、藩の御用医者で町医者の白崎玄水（玄真、この年文化7年5月藩医となる）らであつた。かれらは蘭学入門者、もしくは後に入門するか、あるいは後裔らの中に蘭学入門者が出現した。

ところで、右白崎家は「先祖由緒并一類附帳」（明治3年、加越能文庫）などにより次のように続く。①備前 — ②源右衛門（春庵、京都の長沢道寿に入門、金沢の町医） — ③七左衛門 — ④孫右衛門（町医） — ⑤玄伯（町医、安永4年没） — ⑥玄真（玄水、善政。中野随庵く資、初め藩老横山家の家中医、天明7年藩医、130石、寛政10年没）の弟子、明和9年京都へ遊学し、カスバル流医方く慶安2年〔1649〕来日のオランダ人カスベルが伝えた外科術の伊良子将監に入門く「伊良子家門人帳」く、本道・外科兼業、天明5年御用医、寛政4年両学校急病人療養方主附、文化7年藩医、10人扶持、文化9年没） — ⑦玄令（文化10年相続、7人扶持、学校医学講師、同12年本丸高石垣普請所詰御用、天保3年学校医学指引、弘化2年12人扶持、弘化4年没） — ⑧玄正（実は玄真3男、文化13年江戸へ医学修業くこの時吉田長淑へ入門したことは「門人籍」でわかる⁽¹¹⁾。）、江戸で校正方御用、文政12年帰国、天保5年学校医学講師、同年5月領国疫病流行の節療養廻村、同13年藩医、5人扶持、弘化元年学校医学指引、弘化4年相続、12人扶持、安政3年没） — ⑨玄水（安政3年相続、12人扶持、慶応2年没） — ⑩四郎（顕、恒吉。実は藩医中野随庵4男、慶応2年相続、12人扶持）である。すなわち、白崎家は玄真・玄令・玄正を中心として蘭医学を修得した医家である⁽¹²⁾。特に6代玄真が、早くも明和9年（1772）にカスバル流の蘭医学を学んだこと、また、のち藩の御用医者として寛政4年藩校創設時に急病人の療養方の主附となったことは興味深い。

次に、蘭学医としての新規登用についてみよう。化政期ころより蘭学塾に入門し、西洋医学を学んだ者も藩領内で出現しているが⁽¹³⁾、藤井方亭・吉田長淑は初めから蘭学医として採用された蘭学者で

ある。このうち、吉田について、文化7年7月27日「政隣記」では、吉田長淑20人扶持にて江戸居住の藩医として召出されることが記されている。彼は「藤井方亭同流之蘭学医也、療養方ハ方亭之方宜、学ハ長淑之方宜与云々」とも評価された。また、「鶴村日記」（白山市立鶴来博物館蔵）⁽¹⁴⁾ 文政2年閏4月8日条では、「在江と出口立庵・杉部八郎より紙面到来、（中略）吉田長淑・山本玄丹へ入門之由、申来候」と見える。

次に、弘化元年の「士帳」に記載の吉田道碩は、「先祖由緒一類附帳」により文化7年藩出仕の長淑の養嗣子であることを今回確認した。すなわち、吉田長淑の祖は馬場兵右衛門と称し、徳川家光の代に鉄砲同心として幕府に仕え、その後雲平・兵右衛門・兵助信泰と続き、5代兵右衛門信寿の3男が長淑である。この長淑が母方の祖父吉田長肅の家名を相続し、江戸で和蘭内科の医業を始め加賀藩に出仕する。加賀藩医吉田家の2代目は吉田道碩（言善、実は江戸町医中条道善2男、文政7年養子となり相続、20人扶持、弘化元年8月没）、3代目は吉田淳一郎（成美、長淑。実は丹波篠山藩の藩医足立長雋〈わが国初の西洋産科医〉3男、弘化元年8月養子、藩医、弘化2年8月蘭学修業中につき熟練するまで漢方の治療もするよう申渡される〈「成瀬正敦日記」『藩史料』15編〉、明治元年北越戦争の際柏崎病院詰、同4年石川県貫属）、4代目は吉田謙次郎（江戸昌平黌及び金沢で漢学修業、明治4年外務省洋語学所にて独逸語学修業）と続く⁽¹⁵⁾。なお、吉田道碩やその養嗣子の長淑、藤井方亭ら幕末期の蘭学医の活動などについては今後の課題である。

(2) ニノ丸での貞琳院の治療

ニノ丸での斉広の実母貞琳院の治療について、文政4年（1821）10月「貞琳院様御病中より之一件覚帳」（加越能文庫）から紹介しよう。

十月廿一日

一、月番鞆負、主付内記へ演述、九半頃、^(村井長道) ^(今枝直寛) 貞琳院様今昼頃より俄ニ卒中風之御様子、被為在候ニ付、詰御医師中も相診、各右御症ニ被為在候旨申上、追々御医者中も罷出筈、且又御家中医者田中大玄等も診被仰付候旨、^(人見・御近習) 吉左衛門を以、被仰出候旨ニ付、先承知有之様被申聞之事候、右ニ付而者、御機嫌伺之義、追付被申聞旨之事、

一、貞琳院様御気色御滞ニ付、御広式江年寄中各参上、佐久間武大夫を以、御機嫌相伺候趣、^(盛昭・広式頭) 甲斐守申述、佐久間武大夫江御様子相尋被申候処、武大夫申聞候ハ、一昨日より御風気ニ被為在、^(長連愛) 御食三匁計被召上、昨日者四拾め余被召上、今朝御飯四拾七目計被召上候様、御脇息ニ被為在候処、御脇息引候様被仰、其後御様子不御宜、御手足御不叶ニ被在候間、御寝所へ被為入度被仰候ニ付、六人計り而御かき申、御寝所へ御入被成候処、一向ニ御言語御通し無之、御痰ゼンノミニ被為在、御開キ被成候御気味無之候ニ付、追々診察被仰付候処、卒中風之御症ニ申上候、只今ハ撰正飲御用ひニ候へとも、御薬汁御通りもかいなく、尚々御医者中并田中大玄等診察甚御六ケ敷御症ニ被為在候旨、申聞候趣等いさゝ申聞相済、江間篁斎相招き様子被尋候処、右同様之趣被申聞候、いさゝハ略之、

一、御広式より又出席、各列座、伊藤平右衛門を以、^(惟純・御近習) ^(平出) 中将様御機嫌相伺候処、以同人御意有之御案事被遊候へとも、御様躰御替りも被為在候旨、御意候旨平右衛門述、

一、今夜八時頃火事候ニ付登城、甲州月番、鞆負・内記・権佐・自分罷出候ニ付、^(前田恒因) ^(前田貞道々) 吉左衛門を以、御機嫌相伺相済、御広式へ参上、貞琳院様御容躰高田弥左衛門を以相伺相済、篁斎呼出、御容躰甲州被尋候処、御替りも被為在、御宜方ニハ不被為在旨申聞、追付退出七時前之事、

廿二日

一、退出より御広式へ参上、佐久間武大夫を以、御機嫌相伺候処、次第二御疲労被遊候旨、外ニ御替りも不為在、梁田養元も罷出奉診察、外御医者中同様之趣ニ候、薄荷煎御召上候而可宜哉之旨、外ニ申上候品無之由申聞候、

御機嫌伺之外、月番より演述ニハ朝夕之内、一度伺候筈、人々存寄次第、朝夕之内罷出、宜候旨廿三日ニ演述、内記迄、

廿三日

一、退出より御家中迄御広式へ参上、朝之内年寄中参上之由、大脇六左衛門を以、御機嫌相伺候処、段々御疲労之旨申聞、丸山了悦呼出、御様子相尋候処、最早次第二御疲被遊候段申聞候事、

一、夕七半過月番より紙面、貞琳院様御指重被為在候旨、伊藤平右衛門より申聞候ニ付、拙者儀追付御広式へ罷出、御機嫌相伺候間、御自分様へも追付御出御伺可有候而、申来候ニ付、追付参上、松田五郎兵衛ヲ以相伺候処、申中刻御死去被成候旨、申聞候、

(中略)

廿四日

一、貞琳院様御死去ニ付、御葬式等御用権佐へ被 仰付、関屋中務を以被 仰出、

(中略)

廿七日

(中略)

一、御道筋ニ 御丸御広式より御数奇屋通、松坂、鼠多御門、金谷御門、堂形前、夫より本多(政和)磐松屋敷前、奥村伊予守屋敷前、石引町通り、土留木橋、宝円寺へ被為入、宝円寺より石引町通り、奥村伊予守屋敷前、本多磐松屋敷まへ、広坂、前田織江屋敷前、香林坊橋、片町通り、才川橋、妙慶寺坂、寺町通り、十一屋、夫より野田へ被為入候事、

一、御道筋辻之立警固指出置、往来指留可申事、

(後略)

以上、史料にみるように貞琳院は「卒中風之御症」を引起し、「痰ゼン」(喘息)も見られ、手足が不自由となり、言語も通ぜず、重体となった。これに対し、「撰正飲」を処方するも効果なく、「薄荷煎」(ハッカを煎じた薬。消炎・鎮痛・健胃剤)の調進につき僉議がなされたが、10月23日60歳にて逝去となった。このような貞琳院の晩年の主治医は蘭学医の江間篁斎で、このほか、藩老長家の家中医の田中大玄、小松町医者の梁田養元や藩医の丸山了悦らであったことがわかる。江間篁斎については、藩老前田直時に宛てた斉広の書状(前田土佐守資料館蔵、文政期8月11日付)に「中華而已之医業」は「実理之論」なく、「蘭之医術」は「究理実理之論ニ而人体内影之委敷」く、「療治方甚深切」で「篁斎・元哲杯ハ江戸表」で、「蘭之医術も過半」会得しているゆえ、兩人に治療してもらえば病は必ず宜しくなると述べ、蘭方医術を認知・推奨しつつ、篁斎と大高元哲の実力を認めている⁽¹⁶⁾。また、梁田養元は耕雲とも称す。父梁田養宅(養順・伯彦)は、大聖寺藩医であったが、のち小松町医者となり、明和9年(1772)蘭学者山脇東門に入門する(「山脇家門人帳」)⁽¹⁷⁾。嫡子養元もまた、京都の蘭学塾究理堂の創始者小石元俊(1743~1808)の門下生で、大聖寺藩の御用医者も勤める小松の町医者であったが、文化10年前田家一家の診療を拝命し、貞琳院治療のこの翌年、文政5年藩医となり、150石を給され、金沢に移住する。斉広・斉泰も拝診し、天保13年(1842)没する。次に丸山了悦は、天明8年先代丸山了悦嫡女の婿養子となり、同年100石で出仕、学校医学稽古指引并講師も勤めるが、前田家一家も診療し、天保12年没する(加越能文庫「先祖由緒一類附帳」)。

さて、出棺の道筋は上記史料より二ノ丸→御数奇屋通→松坂、鼠多御門→金谷御門→堂形前→本多

政和屋敷前→奥村栄実屋敷前→石引町通→土留木橋→宝円寺であった。かくして、同寺で葬儀を終えてから、石引通→奥村・本多両屋敷前→広坂→前田道済屋敷前→香林坊橋→片町通→才川橋→妙慶寺坂→寺町通→十一屋→野田へ、といったルートであったことがわかる。このように、宝円寺への出棺は六代藩主前田吉徳の時と同様、金谷御門を通っていることがわかる（前稿）。

(3) 竹沢御殿における前田斉広の治療

竹沢御殿に隠居した前田斉広の治療について、「官私随筆」（奥村栄実著、明治期手写、加越能文庫）を中心にみると [表2] のように整理できる。

[表2] 文政7年前藩主前田斉広の診療と医者

月	日	斉広の様態・治療と医者に関する主な記事
6	6	最前の斉広の様態につき藩医中が「軽き御麻疹」と診断のところ【三守御譜】、再発と江間篁斎が診断。月初めより発熱・発汗が続き、少し良くなるが、治らず。食欲なく、発疹が顔面全体に広がる。昨日御飯8匁計召上る。この日は梨少々、枇杷など食す。御薬は「犀角消毒散」「涼膈散」を服用。御通じは御滑便。
	9	斉広の病状安静（昨日28匁御膳、鯉肩身召上る）、朝御膳13匁召上る。両便快通。
	11	昨日（全く絶食。是まで頻繁に便所に通うが、昨日9度程に減る）より体調良し。朝18匁程召上る。血便無し、篁斎ら診療。顔の発疹も少し薄くなる。
	12	熱気強くなる。「御通之剂」等指上る。少々解熱の所、夜前より再び高熱、食欲なし、御薬は「半夏瀉心湯」に転ずる事に決す（是迄「錢氏白迷散指上る」）。米飯30目程召上り、総体的に快方故、右薬を見合せる。藩医ら大方同意見の内、梁田耕雲・石黒玄丈は、いまだ熱下がらない故、「御下痢之剂」処方考を示す。御薬は高木学純が調合する。一方、御痔痛にて難儀となり、「御痞」（腹痛）有り。大便頻繁の所、少し減る。
	16	段々御快方（14日快寝、御痔痛、素麺両度召上る。15日快方。御飯40目召上る）、9時頃丸山了悦が診療する。朝御飯31匁5分程召上る。「半夏瀉心湯」服用。江間篁斎・丸山了悦僉議し「大蓮菟（著）飲」に転向の旨命有り。夕方より御気重に思召、食欲少し減少、御痔痛少々有り。
	19	斉広「一番酒湯」に浴す。朝御飯少々（昨日70目余）召上る。御通両三度、痔疾少し快方する。
7	朔	御容態同篇の内、御通じ不宜（昨日3合余御通、大便昨朝御快通、御飯60目、くしこ・やまのいも・饅頭、計100目程召上る）。昨日より篁斎が診療担当。薬は「大蓮菟飲」を調進する。
	5	斉広病状悪化につき藩老ら竹沢御殿へ奉伺（1昨日迄薯蕷等召上る。昨日は煮返し御飯の上澄に砂糖を入れ8分目程召上る、御通じ3合余。横山求馬家中医津田随分斎、前田土佐守・前田弾番家中医も拝診。藩医らも大方補剂処方の意見多し）。朝御容態は昨日とはほぼ同様、不食、御通じ朝8匁、事々御物忘れの御様子、昨日より「春沢湯〈単参3分充〉」を丸山了悦が調進する。
	6	熱気強く「御氣先御張」、脈の高大、「□蘇散」を加減（大方は「唐侍中方」と同事）して処方する。朝小水1度に8匁程（昨日は2合8匁程）、大用も小が1通。1日の御通じ計1合8匁。さ、げの実を猪口に8分目程、また、昼後さん餅3召上る。一方、招請の京都より医師竹中文輔が到着、夜前拝診する。「混雑成御症」、何れも「不軽御儀」にて「御余症」（合併症カ）が出ないよう望むと診断。薬は「生姜瀉心湯」指上の由上申。しかし、先ず「醒熱治水之薬」「越脾湯一帖（貼カ）半計紫雪御兼用」処方するが、治定無し。

7	竹中文輔が拝診。朝より昼頃迄両度に1合程御通じ。奥州干飯御茶碗に8分目程召上る。昨夕より「御乾燥」（渴きカ、脱水症状）、この日水様の物吐瀉。夕方も文輔拝診、御脈状は平穩。干飯又6分目召上る。
8	朝不食、御通2合2勺計、7勺程大便。夜前より御乾燥、水を好まれ、紫雪と冷水を茶碗に2度召上る。夜前より「御陽脱気味」、文輔が拝診、脈状浮弱、惣軀御疲労と拝察、「只今にては御難治之御症」と拝察。
9	飲水等「御胸膈之間に御宿留」、一切下行無く、御通も無く、薬は「沈香降気湯」「豁胸湯合方」にし、夜前より差上げる。夜半胸膈辺が発熱、紫雪を御七にて少々宛差上げ、1帖（貼カ）半程召上る。暁天煮返御飯7匙計召上る。6時頃小豆飯煮返御粥30目8分程召上る。御通9勺5才。朝文輔が拝診する。昨夕より脈状は不宜と診断。夕9半時葛素麵40目程召上る。以後「御煩悶」「御床帰杯毎度」成され不宜、又文輔拝診。夜中更に「御煩悶強」御薬も不飲、御通は無し。
10	暁に至り「御困（昏）睡」状態となり、水を差上げ、召上る。以後少し回復したかの御様子、御薬通じ「脈還散調合」、しかし、召上らず、次第の御疲労となり、4半時過終に御逝去となる。一方、江戸詰藩医吉田長淑呼寄の所、道中にて死去【三守御譜】。
11 (ママ)	辰刻齊広の御容態時々拝診の所、「最早指重り」（危篤）の旨、江間篁斎等侍医ら上申。齊広逝去の日につき、表向は12日と触。（官私随筆では実の逝去日を7月10日とし、及び11日と解せる箇所も見られるが、「齊広様御伝略等之内書抜」では10日とする）
20	幕府、齊広の診療のため幕府御医師橋宗仙院を派遣、暁江戸出発し、熊谷にて訃報を聞き引返す【三守御譜】。
28	丑の上刻竹沢御殿御出棺、天徳院にて御葬礼、5半時御寺出棺、野田山へ8半時御移る【横山氏日記】。

*主に「官私随筆」を主体として作成したが、「三守御譜」「横山氏日記」（いずれも加越能文庫蔵、前田育徳会『加賀藩史料』13巻、清文堂、昭和56年復刻にも所載）に依る場合は【 】で示した。

〔表2〕より、文政7年（1824）6月6日～7月28日までの齊広の病状は、麻疹のこじれと同時に痔疾も重症であったようで、発熱・湿疹・痔痛・下痢・腹痛・吐瀉などに苦しんだことがわかる。これに対し、犀角消毒液・涼膈散・半夏湯心湯・「大蓮著散」（後述）・順気和中湯・春沢湯・生姜瀉心湯・「醒熱治水之薬」・越脾湯・紫雪・沈香降気湯・豁胸湯といった薬が処方された。また、京都からも町医者竹中文輔が齊広の治療に招請されている。この竹中文輔については「海内医林伝」（文政11年）の中に「東洞院ニシキ、古今く古方派・後世派」折中家、内外、初名文卿、名温、字子良、号南峯、又号済美堂、又号時為帝裔、紀州人、和田東郭高第弟子治術之名震動一世」と記されている。また、先述の「医家大相撲」中には小結として、その名が見えている⁽¹⁸⁾。一方、蘭学医の吉田長淑は齊広の治療に間に合わず、自ら没したことが〔表2〕でもわかる。このほか、藩老横山家の家中医の津田随分斎、藩医の江間篁斎・梁田耕雲・石黒玄丈・高木学純・丸山了悦らが治療に当たった。このうち、高木は嘉永4年漢蘭折衷医の華岡青洲創設の医学塾春林軒（同嫡子の鷺洲の代）に入門している。

また、石黒玄丈は天明3年の侍帳及び文化元年頃の「金藩分限録」の石黒周軒（15人扶持）の系統の可能性もあり、弘化元年の「士帳」の石黒道以は「諸士系譜」（加越能文庫）に、天保8年12人扶持と記載されている人物であろう。因みに石黒家について、「先祖由緒并一類附帳」（加越能文庫）では①古矢孫兵衛（越前の浪士、加賀石川郡水島駅に移住）— ②古矢孫右衛門 — ③古屋藤兵衛 — ④古矢重右衛門 — ⑤石黒道以（水島にて医業）— ⑥石黒玄寿弼（同、天明3年没）— ⑦玄丈道友（同、文化2年没）— ⑧道一友之（文政5年藩医、70石、天保8年没）— ⑨道以直之（天保8年相続、

12人扶持、同15年明倫堂医学講師、其外金谷御普請御用等、文久元年没）— ⑩一郎雋（文久元年相続、12人扶持、同年京都へ勤学、慶応元年帰国、同2年明倫堂医学講師、同4年卯辰山医学館へ入塾、明治2年退塾）と見える。つまり、斉広の治療に当たった玄丈は8代道一か、または9代道一のいずれかに比定できる。また、文化8年春林軒に入門する水島村の石黒溪輔は元丈とも称する8代道一であろう。さらに、華岡鷺洲の代の安政2年（1855）同じく春林軒入門の道以は9代道一とみられる⁽¹⁹⁾。

（4）金谷御殿における延之助の治療

斉広の子延之助は、大いなる学問好きであったといい（「賢良公子御夜話」）、「官私随筆」（奥村栄実自筆、天保5年〈1834〉5月7日条）によれば、延之助は御疱瘡のところ、養生叶わず、未の上刻（1～2時の間）（実は昨夜9時〈12～1時〉過ぎ）頃御死去と見え、享年14歳であった。以下、延之助の金谷御殿における治療について、「官私随筆」（天保5年5月6日条）、「本多政和覚書」⁽²⁰⁾「鈔録合集」（天保5年、加越能文庫）より紹介しよう。

延之助の容態は天保5年5月「御疱瘡御順症」で、軽き「御痘」であったが、4日には江間篁斎が昼9半時頃拝診の時には、まだ御目覚めでなく、女中らに尋ねたところ朝一度御目覚めになったが、またお休み成られた。そこで、篁斎が段々と起すと、御飯を2、3碗召上り、書物30枚程御覧になるなどしたが、再び御眠りになった。「夜前はスボイト上候処、御通し」になり、薬は「大蓮著飲」・涼膈散・石膏を加え、紫雪も処方したが、咽へ通らず、石黒玄丈も執匕した。右長時間の睡眠のほかは、変わった事もないが、合点参らぬこと故、丸山了悦・大庭探玄・二木順孝・森快安が拝診したところ、「何故存寄無之御症之儀、何共被名付難き由」を述べた。了悦は「御痘」は格別の事ではないが、御疲れのように拝察と上申、先ず其分の御薬を調進した。右御飯後また御眠り、夕方に至っても御目覚めなく、何度起こしても効果なかった。また、森良斎も治療に加わり、薬処方に曲頭管を使用することを協議した。ほか藩医及び横山家の医者津田随分斎、初丸（藩老前田直貞）の担当医者遠田元準（前田土佐守資料館蔵文書、加越能文庫「金都柱石史」「亀田氏旧記」等に見える）⁽²¹⁾が拝診のところ、何れも御難症の旨を申上げ、何の病気か名付難く、是まで見たことのない病という。よって段々僉議を遂げ、延之助を抱上げ、御薬を差上げると、少々身動きされ、御むせ、難儀そうに見上げられた。しかし、意識は無い様子で、御鼻より「香さん」の御薬など差上げたが、一向効果なかった。朝も奥村丹後（栄実）の御手医者片山君平（文化10年4月21日華岡青洲に入門）、町医者山本文玄斎（文化8年2月28日華岡青洲に入門）、本多勘解由医者高島大膳などが拝診するが、容態が変わることはなく、ついに逝去に至った。

さて、右史料中の「御薬ハ大蓮著飲」については、前述の斉広の治療にも処方されたもので、刊本『加賀藩史料』は「菱實蓮莖散」または「大蓮莖散」としている⁽²²⁾。しかし、奥村栄実自筆本を中心に明治期の写も合せて、「官私随筆」及び「鈔録合集」（天保5年、5冊目）を丹念に検討すると、奥村の自筆本では特に虫損もあり、判断しにくい面もあるが、「大蓮著飲」と解読できる。「大蓮」は黄蓮のことで、その根を乾燥したものは健胃薬となる。また、「著」は「めどき」「めとき」「めどはぎ」で、若芽は利尿・解熱剤としても使用される。或いは「大蓮著飲」は大蓮と著を混ぜた液状の飲み薬を指すのであろうか。これら薬名のついては、今後の課題である。さらに、「スボイト」（「官私随筆」）は液状注入器または灌腸を示しており、このように西洋風の器具が使用されており、「曲頭管」（「本多政和覚書」）の使用の検討も興味深い。

また、森良斎（?～1846）は藩老横山家の家中医で、のち外科兼帯の藩医となる。文化期の住居は十間町で、華岡青洲の塾春林軒に文化14年入門、塾頭となり、帰国後は藩校明倫堂で医学稽古指引と

なる。天保3年良斎のもとに小松の町医者富沢敬斎（金子鶴村の孫）が入門する。また、良斎は藩医白崎玄正・黒川良安らと金沢城二ノ丸造営の絵師梅田九栄季信を弘化3年に治療するが、自らも同年に没する⁽²³⁾。

このように、延之助の治療に当たったのは、江間篁斎・森快安・二木順孝・丸山了悦・大庭探玄（後述）、藩老横山家の家中医森良斎、同津田随分斎、藩老前田土佐守の家中医遠田元準、藩老奥村家の家中医片山君平、本多勘解由（政養、家老）の家中医高嶋大膳、町医山本文玄斎などであった。このうち、前述のように江間・二木・森良斎・大庭・津田・片山・山本は蘭学に通ずる医者である。また、江間篁斎については、前述のように貞琳院の主治医でもあり、文政期の前田斉広の書状に大高元哲とともに蘭方の医術を修得していることが見え、また、吉田長淑とともに蘭人の屋敷を訪問していることなどから、篁斎の蘭学の師は吉田長淑であったものと解せる。

(5) 前田家の蘭書と斉泰の診療

5代綱紀は天和3年（1683）阿蘭陀のドドネウス本草書を買求め、オランダへ前田家の家譜（木下順庵作）を送ったことは「阿蘭陀国へ送る御世譜写」（加越能文庫）等により明らかである⁽²⁴⁾。かくして加賀藩或いは前田家における蘭書の収集はそれ以来か、或いは11代治脩・12代斉広の代に多数蘭書を収集したのであろうか。「鈔録合集」（加越能文庫、「温敬公御日記」）天保6年9月朔日条に、前田斉泰が水戸藩主徳川斉昭と江戸城内に会した時の様子について次のように記されている。「当家ニ蘭書多有之様ニ被聞、苦からずバ一覧も被成たきよし、表題計ニても何々と申事被聞度旨也、何れ承知仕候、得としらへ可申上旨答へ置、（中略）今日於殿中、水戸殿約束之阿蘭陀書籍之義、善右衛門江遂僉議也」とみえる。また、同様に9月29日条には「水戸殿より被申越候蔵書蘭書、夫々今日直書相添へ、聞番使者ニて進上」と記されている。さらに、10月朔日条には「殿中におゐて水戸殿御逢、昨日之蘭書挨拶、且返翰も御指越可被成処、今日面会之事故不能返翰旨等被仰聞」と見える。すなわち、徳川斉昭が前田家は多くの蘭書を蔵しているゆえ、藩主前田斉泰に見せてほしいと申し入れたことにより、斉泰は斉昭に蘭書を貸し出したが、まだ返還できないというものである。

因みに、前田家が所蔵する医学書・本草書には、『加陽物産志』（稲生宣義・内山覚中撰・写）、『庶物類纂』（1054巻、稲生宣義編著）、『庶物類纂図翼』（写）、『享元塵余志』（写）、『草木譜目録』（2巻、阪元慎く村井又兵衛家中医、文化8年新堅町住編）、「加賀国能美郡草木之類書上申帳」（宝暦14年写）、『加能所産薬種考』（坂井泰順撰、写）、『食物私説』（堀部養佐撰写）等がある⁽²⁵⁾。また、幕末の西洋式武学校である壮猶館旧蔵の蘭書には他の地方にないものが相当数あることが指摘されている⁽²⁶⁾。

次に天保13年5月下旬ころより脚気を患っていた藩主斉泰の診療には大庭探元が「沈香豁胸湯」を処方しており、「只今までニ而ハ蘭医（オランダ伝来の医術、蘭方医）之申上候ジキターリス（利尿・強心剤、シーボルトも使用）御用」ることにに関して、藩老奥村栄実らが審議することを相談している（「官私随筆」天保13年6月21日条）⁽²⁷⁾。つまり、この時点で少なくとも藩医はもちろんのこと、重臣たちの間にも、蘭方医・蘭学医らが上申しているところのジキターリスという蘭方薬が重要視されていたことを示している。これは、斉広に引続いて斉泰においても蘭医学の治療に関することを示し、ひいては藩領内の蘭医学の導入を意味しており、特筆すべきことである。すなわち、御用医者も含め、ほぼ天保13年段階で生存し、かつ蘭医学を修得している医者は、藤井方亭・吉田道碩・大高東栄・江間篁斎・白崎玄正・大庭探元・森良斎・片山君平などである。

右のうち、大庭探元（養元、敏徳）が吉田長淑の弟子であることは蘭馨堂の「門人籍」によって明らかである⁽²⁸⁾。なお、「諸士系譜」（加越能文庫）によれば、大庭家は①探流（探柳、本道、享保9

年新知150石、同12年没) — ②探元(寛延2年150石、宝暦4年没、47歳) — ③順元(教忠、10人扶持、安永2年没、32歳) — ④貞元(保入、寛政3年100石、のち150石) — ⑤探元(養元、文化14年120石、天保11年170石)と見える。したがって、斉泰の診療に当たったのは5代の探元であろう。

ところで、近世の医薬については、寛政から文政期に蘭方医や漢蘭折衷医らはアラビアゴム・サフラン・デギタリスなど35種ほどの洋薬の新輸入薬を喜んだといい、安政期以降洋薬が次第に需要を増し、金沢においても蘭医の輸入薬の使用が多くなってくるという⁽²⁹⁾。今後加賀藩でのこれらの使用の実例を探ってみなければならぬであろう。

ともあれ、招請された京都の典薬寮の医師小林豊後守(1803~1851)が6月25日金沢に到着する。同人は「天保医鑑」(天保14年)に「内科、源具訓、字尚古、号蘭溪、又淵々斎、博採衆方審医術○御池境町」などに見える人物である⁽³⁰⁾。以後、大庭探元・長谷川学方・江間篁斎らと斉泰の治療にあたる。処方された薬は「七味降気湯」「外台(カ)甘草乾姜湯」であり、また、便秘があるため「蠅蛄菜湯」の調進が「官私随筆」に記されている。

二、蘭学医らによる領民の治療

(1) 金沢城修築と医者

文化5年(1808)正月、金沢城は大火にみまわれ、その後の修築において、「政隣記」⁽³¹⁾文化6年11月24日条には金沢城菱櫓の造営に従事する大工等が濠中に落ちるといった事故が次のように記されている。9時過御城中御造営所の菱櫓の足代が、雪なだれ等にて壊れ、この足代の上にて作業中の大工等12人が御堀の中へ落入り、内2人は中で柱竹等に取り付き無事であったが、1人は「胸等を強く打、痛候躰ニ而、吐血多く、用薬も治り不申候処、塩川鯉一郎療治ニ而吐血止、用薬も治り多分」命は助かったという。残る9人も命は助かったが、水中に落ちたことで、「大いに凍へ、戦慄甚く」、御堀際で草を焚き、先の1人も加えた右10人とも、裸にし、「薦を着せ温め」、温酒・薬等を飲ませたところ、程なく9人は回復し、1人は前記の通り塩川の「療養ニ而快方」したという。上記のことは、造営方を担当した高島厚定による「御造営方日並記」(加越能文庫)⁽³²⁾には無記載である。江戸詰の塩川に加賀来訪は町方支配のため、町奉行の「政隣記」に詳細な記載があるのであろうか。

この塩川鯉一郎について、文政3年「醫家人名録」龍峯蔵版⁽³³⁾に「外科、湯嶋天神下同朋町 加州金沢 塩川鯉一郎」と見える。また、加越能文庫「御用番方御城方御勝手方御用之覚」文政元年8月3日条によれば「塩川鯉一郎、旅宿賄料、未僉義も難付候ハ、先日之ことく、重而中勘金相渡候様仕度旨、町奉行断」と記し、江戸詰の塩川は、文政元年にも金沢勤務となり、旅宿の賄料の中勘金を渡すことを町奉行が申出てきた。これにより、当時の塩川は町奉行支配下であったものとみられる。また、年次が不明であるが、幕末ころ、塩川は30人扶持を給されていたことがわかる⁽³⁴⁾。

ところで、近世初期以来、城郭・石垣の建築の際、怪我人・病人の発生を予測して、医者を配備する例は天下普請や熊本藩・南部藩などの事例でも確認されるが⁽³⁵⁾、文化5年大火後の再建に際しても同様である。この後も例えば、天保15年より翌年までの前田慶寧の御座所増築について記した「世子御座所一件」(加越能文庫、御近習の大野織人筆、明治期写)によれば、これに関わった医師藤田道仙・松田常安・黒川元良への下賜金150疋の目録が書き上げられている。これは、日数31日、1人充て勤務したことによるもので、天保3年金谷御普請の際の勤務日数の割合を換算したものであるという。また、この時怪我人に対し「八物湯三貼」を調合した御広式当番医師の江間元琳には金100疋の下賜金を書き上げられている。さらに、加越能文庫、慶応元年6月「御普請奉行勤方留」には、「文化十二より同十四年江懸、東 御丸高御石垣積直、御普請之節、中古無之大御普請ニ付、 御城代江相達、奉

行壺人宛并御普請会所御道具奉行壺人宛、御医者本道壺人、外科壺人充、毎日相詰申候」などに見える。

ともあれ、右、文化5年の大火後の城普請と医者の治療の事例として「御造営方日並記」から整理してみよう。なお、これに関して、金沢城の再建工事における労務管理の視点から取り上げた研究などがあるが⁽³⁶⁾、ここでは、それぞれの医者別に、専門・治療日数・治療人数について、[表3]にまとめた。

[表3] 文化6年～7年金沢城造営における作業人の怪我・病の治療に当たった医者

番号	医者名	専門	治療日数	治療人数
1	黒川元恒（玄亨）	外科	15	29
2	下田尚斎	外科	10	10
3	南保玄隆（玄伯カ）	本道	17	38
4	藤田道乙	本道	7	7
5	今井昌軒（正軒）	外科	13	13
6	堀 周庵（周安）	外科	13	13
7	下田元寿	外科	6	6
8	大石慶安	本道	9	14
9	池田養仲（養中）	本道	5	5
10	不破文仲	外科（カ）	5	5
合計	10人		延べ100日	延べ140人

＊加越能文庫「御造営方日並記」（石川県教育委員会金沢城研究調査室『御造営方日並記』上巻・下巻、平成16年・17年に翻刻）より作成。専門の欄は石川県立歴史博物館蔵、才記家文書「二ノ御丸御造営留帳」（『同』下巻、平成17年にも収録）による。なお、怪我人など、このほか記載があるが、本表では怪我や病気の手当てを行なった医者の記載がある場合のみ取り扱った。

この期の金沢城造営においては、怪我などの記載は少なくないが、医者が治療した怪我や病気は[表3]が示すように、延べ100日、100例であり、その人数は延べ140人である。まず、医者に掛かった患者は3分の2が怪我によるものであった。また、外科の医者はほぼ怪我の手当てを、また、本道の医者は「煩出」すなわち病気の治療をそれぞれ担当したが、例えば外科の黒川元恒が煩出の治療に当たる場合もあった。

次に怪我や病気の発生場所をみると、橋爪丁場・波ノ間・井戸・菱櫓表式台・五正建御廐・薦ノ間・河北門外・広式御居間方丁場・御居間書院丁場・御雛土蔵丁場・五拾間長屋・拾間長屋・御見物所丁場・御舞台丁場・対面所・御小書院丁場などである。患者は出大工組・金沢組・魚津・滑川・能登中居・田鶴浜・笠師などの大工をはじめ、木挽・畳屋・屋根葺・壁方請負人・日用、藩老の長家・横山家・前田伊勢守家の役小者など様々であった。怪我などの内容をみると、斧や材木・鶴嘴などの落下によるもの、二階より転落するものなど、外傷のほかに内科的疾患を伴う場合などは、外科と本道の医者が同時に治療していることが注目される。特に落下事故が大きかったのは、文化6年の10月2日、表式台の足代が折れ、魚津・滑川の大工らが怪我をしたもので、外科の黒川元恒と本道の南保玄隆が同時に手当てをしたが、11人は何れも作業の続行はできなかった。この日の事故が影響してか治療人数のもっとも多い本道の医者の南保玄隆は延べ38人を治療し、一方、外科の黒川元恒は延べ29人の手当てをしている。

また、全体的に、怪我や病気の発生後、作業を続行できたのは100例のうち、21例で、全体の21%であった。反対に、一度治療後作業に戻ったものの結局作業を続けることが出来なかった場合も含めて、

63例、63%が作業を続行することができなかった。残りの16例、16%は不明である。なお、怪我以外の病気では、穴からの「気候」というような何らかの気体による気分の悪化や、腹痛・歯痛によるものであった。

このように、外科6人、本道4人、計10人の医者のうち、次の4人が本人、乃至はその後裔が蘭学医である。1人目として黒川元恒に關してみよう。同人は前述のほか、本道の医者と大工や木挽等の怪我の手当てに当たっている。黒川家は近世中期に御用町医であったが、藩医としては①黒川元良（天明5年藩医、10人扶持、寛政10年20人扶持）— ②元恒（寛政11年15人扶持）— ③覚計（覚針カ）— ④元良（文政、15人扶持）と続く（加越能文庫「諸士系譜」）。一方、文化元年頃の「金藩分限帳」には元恒（15人扶持、大工町）、文化4年の「加陽武将」には記載がなく、同4年からの「帳秘藩臣録」中の文化9年に元恒（20人扶持）が、弘化元年の「士帳」には元良（20人扶持、大工町）がそれぞれ記されている。先述の漢蘭折衷医の荻野元凱のもとに寛政12年入門した黒川元恒は、藩医として2代目の人であり、上記の文化の造営医療に当たった蘭学医である。一方、黒川家の住居については「寛文七年金沢図」「延宝金沢図」によれば大工町辺に屋敷を拝領し、また、重臣前田貞親の手記にも記されているなど、黒川家は近世前期から御用町医としての要素が強かった⁽³⁷⁾。そして、この造営医療に当たった元恒の孫、元良哲が京都の蘭学者新宮凉庭（天保10年順正院創設）のもとに入門し、『究理外科則』の翻訳に参加している。なお、同門の同書の翻訳には、加賀の今邨鬼朔潤も参与し、また、加賀藩医の加藤邦安恕は『泰西疫論』の翻訳スタッフの1人に加わっている⁽³⁸⁾。なお、右の今邨（村）は「先祖由緒一類附帳」（加越能文庫）によれば、藩の重臣玉井勘解由の家中医である。嘉永3年40石を相続、文久2年50石となり、慶応元年種痘所御用指引役、明治元年養生所御用雇、主附御医者、同3年医学館副教師となる。

2人目は南保玄隆（?～1837、翼、10人扶持）で、前述のほかに、畳屋、対面所懸りの大工や疝癰を起こした木挽などの治療をなす。その曾孫玄隆定（?～1858）は安政2年春林軒に入門する。3人目は外科の今井昌軒（?～1834、維政、15人扶持）で、同人は材木コロガシの下に足が挟まった怪我人や大工・屋根葺らの治療を行なっている。この後文化9年（1812）華岡青洲に入門する。これに先立ち同5年二ノ丸普請詰御用となり、天保3年までの間、本丸高石垣・学校同鎮守・金谷御殿など金沢城の各所の造営普請御用を拝命する。なお、数回江戸詰となり、「今世医家人名録」（文政3年）には「本郷五町目上邸」に住していることが記されている。4人目は本道の池田養仲（1781～1835）である。同人は儒者金子鶴村から「解体新書」を借用したり、また京都に遊学するなど蘭学を学んだ医者である。大工・木挽の病や二ノ丸の井戸の掘削作業中落下してきた鶴嘴により怪我をした日用町人に対し、外科の黒川元恒とともに手当てを成している⁽³⁹⁾。

（2）疫病流行と諸郡へ医師派遣

安永2年（1773）能登・加賀にて疫病がまん延し、小瀬甫元・藤田道閑・池田昌貞・加藤玄叔・加来玄達・小倉正因・江間玄貞・丸山了悦といった藩医が各地へ治療のため派遣された（前稿）。さて、加越能文庫「加賀藩史料」（天保5年5月9日「御用儀品々留帳」）によれば、藩では、「天保四年（1833）不作之後、翌年御領国一統疫病流行、困窮人薬用方行届申間敷与僉議二而、諸郡江御医者御指向施薬」することになり、「郡々宿立・町立等之ヶ所二而、御医者止宿」させ、「泊所等向寄之村方病人指出、御薬頂戴為仕可申、病人泊所等江罷出兼候歟、或者村中病人多之分者、其様子村役人より御医者方江罷越申述、其村方江御医者相招」くよう申渡された。こうして、諸郡へ派遣された藩医は「加賀藩史料」加越能文庫（天保5年5月9日「御用儀品々留帳」）及び「鈔録合集」（加越能文庫、

5冊目〈諸事留帳、成瀬近[正カ]敦〉」によれば、次の通りである。

加賀能美郡には関玄廸（寛政8年10月朔日22歳の時津田宇内の紹介により荻野元凱に入門〈「荻野元凱門下姓名録」〉）、同石川郡には加来元貞・魚住恭葺、同河北郡には池田三同・堀周庵、能登口郡には梁田耕雲・松田常安、同奥郡には有沢良貞、越中砺波郡には不破文中・黒川元良、同射水郡には藤田道仙・河合善庵（病氣ニ付、代り小瀬貞安が勤める）、同新川郡には中村文安・今井昌軒の派遣が定まった。このように、加賀・能登・越中の領国の郡内に、初めは関玄廸以下1～2名ずつ、合計13人の医師による疫病治療のための派遣が決まった。しかし、右のうち実際には河北郡への堀周庵の代りに小川玄沢の倅小川善徳が雇われ派遣された。「御雇御用」と記されているゆえ、善徳は町医として臨時に雇用されたのであろう。また、能登口郡への梁田耕雲の代りに白崎玄令の弟で、その養子となる白崎玄正が決まり、郡内の治療に当たっていたが、自ら発病したため、代理として、河合善庵が出張した。このため、同人は射水郡への派遣医師であったが、小瀬貞庵がその代理を勤めた⁽⁴⁰⁾。一方、口郡に赴いた松田常安については、中島村で蔵宿を勤める今本屋左助による「末世目覚草」に「疫病流行申ニ付、御上様より御典医加越能江十八人（ママ）御下シ、口郡へ式人之内、当郡江松田常庵与申御医者五月廿六日着、本屋ニて五日計り御逗留也、自分も頭痛之薬法貰申也」と見え、当地で5日間ほど治療・薬方に当たったことがわかる⁽⁴¹⁾。なお、前に少し述べたが、関玄廸は寛政8年荻野元凱に、梁田養元は文化5年以前、蘭学者の小石元俊に、中村文安は文化5年以降に小石元瑞（小石元俊嫡子）に、白崎玄令は文政7年以前に吉田長淑に、黒川元良は天保10年以降に新宮涼庭にそれぞれ師事する。また、文化9年今井昌軒が、文政10年松田常安が、それぞれ華岡青洲に入門する。このように、かれらは蘭学・西洋医学を学んだ藩医であった。なお、中村文安は天保3年120石（「諸士系譜」）の藩医で、小石元瑞の門人帳「櫻園門籍」にみえる「中村良安」と同一人とみられる⁽⁴²⁾。

おわりに

以上、金沢城を中心とする化政・天保期の医療と蘭学医について考察してきたが、次のようなことがわかった。

第一に、11代藩主治脩の診療では、寛政期ころにすでに加賀金沢出身の漢蘭折衷医で宮廷医家の荻野元凱が二ノ丸において、過労による発熱と気力減退に対する治療を行なった。また、隠居し晩年には、宮廷の御用医者畑柳啓及び同人の弟で京都の町医者の畑柳泰といった京都の著名な医者を金沢に招請した。さらに、津山藩から蘭学者・蘭学医の宇田川玄真も招請し、新医方の西洋流の治療に当たらせたことは特筆される。彼らは金沢城内や城下の旅宿でそれぞれ藩による相応のもてなしを受け、旅費や診療の手当金などが下賜された。これを機に当藩主斉広は、蘭学者・蘭学医の藤井方亭・吉田長淑を藩に登用した。初めから蘭学者・蘭医としての採用は、これが初の事例であった。この頃より次第に蘭学医の活動が注目される。

しかしながら、一方で、化政期以前、能登鳳至郡大屋の坂東文二が明和2年（1765）大坂の林春庵に蘭医学を学び、加賀小松の小林笠之坊が京坂に遊学し、天明7年（1789）に吉雄耕牛の門人児玉尚斎に紅毛流医学を学んだ事例がある⁽⁴³⁾。これらに加えて、本稿において、加賀金沢出身の荻野が人体解剖などを行い、宝暦13年に西洋医術の刺絡を論じた『刺絡編』を出し、この頃より藩領内からの医者ら多くの人材を育成した荻野元凱の事例を垣間見た。さらに、治脩の診療に当たり、同年間もなく藩医になる御用医者の白崎玄真（玄水）が明和9年にカスパル流の伊良子将監に入門するなど、化政期以前に蘭医学を修得している事例などを確認した。

第二に、二ノ丸での斉広の実母貞琳院の晩年の卒中風の治療にあたったのは、江間篁斎・梁田養元

や田中大玄など蘭学医や蘭学関係の医者を中心に、町医や藩老の家中医も加わり、また、藩校で医学講師を勤める丸山了悦など注目すべき医者たちであった。さらに、竹沢御殿での斉広における麻疹のこじれと痔疾の悪化という晩年の治療においては、蘭学医吉田長淑はその治療に間に合わず、自ら没したが、上記の医者のほか石黒玄丈・高木学純などの藩医、藩老横山家の家中医津田随分斎ら蘭学の医方に通ずる医者も担当した。ほかに京都よりは竹中文輔が招聘されている。また、疱瘡のため14歳で死去した斉広の子延之助の治療を行なった医者は、藩医のほか各藩老の家中医や町医もあり、特に江間篁斎・森良斎・大庭探玄・津田随分斎・片山君平・山本文玄斎は蘭学を学んだ医者であった。第三に、脚気を患っていた13代斉泰の診療においては、京都より宮廷医師の小林豊後守が招請され、大庭探元・長谷川学方・江間篁斎らとともに拝診した。また、この頃重臣の間でジキターリスという蘭方薬の使用が審議されたことを確認した。藩主前田家或いは藩の施設所蔵の蘭書や草木書の収集は、5代綱紀のころより始まったものともみられるが、天保5年前田家所蔵の蘭書が多数あるとみなされ、水戸藩主徳川斉昭へ蘭書を貸し出すなど、斉泰における蘭学の受容の一端を垣間見ることができた。第四に、文化期の金沢城の大火のあとの再建に際し、領内の大工や木釣り・木挽き・畳屋・屋根葺などの怪我人・病人の治療には、外科・本道の各専門の10人の藩医が担当した。この中には、黒川元恒・南保玄隆・今井昌軒・池田養中といった蘭学につながる医者も出現した。第五に、近世中期に続き、天保5年領内の諸郡へ14人の藩医の派遣が定まったが、医者自身の発病などにより、代理も含め15人の藩医らが出向いた。これらの中には、関玄廸・梁田養元のほか、今井昌軒・中村文安・松田常安ら蘭学の修学者が含まれていることがわかった。

このように、化政・天保期を中心として、藩主前田家の医療においては、近世前期より引続き医学の中心地京都から優秀な医者を招請することに加え、新しい医方を学んだ蘭学医らによる治療も行われた。すなわち、京都から名医を招請することは近世前期から続いてみられることである。当時医学の中心地京都から、しかもわが国最高級の医療を受けていると見做されている宮廷の医家や同御用医者、著名な京の町医を招請して藩主家の治療に当たらせることが、ある種のステータスであったものとも解せる。さらに、加賀藩の医療では、まず第一に最良の医療は藩主前田家に向けられたことはいうまでもない。文化期以降、次第にその影響を受けて、金沢城造営における治療や諸郡の疫病治療といった、領民の医療に、蘭学医が含まれ、或いはのちに蘭学を修得し、或いはその後裔たちに蘭学修学者が現れるなど、加賀藩の医療をみる上で特筆すべき点である。

他方、文政3年石川郡鶴来などにおいて、藩の重臣多賀直清の家中医で蘭学者の真田道鐸（?～1834）による蘭方の薬の効能が認められているなど⁽⁴⁴⁾、注目すべき点がある。こうしたことをもって、加賀藩領内の化政・天保期蘭学修学者の治療の多くが、ほぼ完全に蘭方・蘭学的かという疑問が残る。蘭学を学んだからといって、すぐ蘭方薬が入手できたのかという問題もあろうし、ほぼ完全に蘭医方を取り入れ実践できたとは、到底考えにくい。蘭学医も複数のなかの医療スタッフとして、ある程度漢蘭の薬、医方を併用したこととも推察される。多くが蘭医学を学ぶ前は、和漢の医方を修得・処方しているとみられるからである。こうしたことを1つ1つ検証していくことは、かなり困難なことともみられる。しかしながら、近世後期の漢蘭方の薬の使用や領内全体の医療の問題を含め、様々な事例を検索していくことが必須であろう。なお、幕末の村方の蘭方医においては、漢方薬の薬効を利用しつつ、蘭方薬を使用するというのが一般的であったという⁽⁴⁵⁾。ともあれ、少なくとも藩主斉広が蘭方医学の効能を評価し、また、江戸藩邸で弘化2年吉田長淑（淳一郎、成美）にみられるように蘭方がまだ修業中のためをもって、漢方をも合せ治療するよう申し渡された事例から当時、藩内では漢方と蘭方が区別され認識されていたことがわかり、注目される。このように、重臣たちも蘭学医・蘭医

として、かれらを認知し、和漢の医方と蘭方の医方を区別して認識したこと、さらに、医者が蘭医学における実証的・実験的・科学的医方を修得し、その効能を熟知しつつ、様々な治療を施したことが、重要なものであり、やがて迎える近代の西洋医学の先駆けとして、評価されるべきものと考ええる。

今後残された問題は多く、紙幅の関係もあり、例えば藩主斉泰らの診療に関しても一面しか考察することができず、また、天保期全体の前田家の医療に触れることができず、不十分であった。さらに、近世後期の侍帳にみる医者への検索や各入門帳からみる医者らの動向、幕末期の医療も課題となった。

〔註〕

- (1) 加賀藩の疾病史の研究には、前川哲朗「疱瘡・コレラの流行と対策—藩政期疫病史の試み—」（『市史かなざわ』6号、平成12年）、竹松幸香「加賀藩上級武士の疾病・医療について」（『加能地域史』47号、平成20年）などがある。また、蘭学史では津田進三「日本最初の蘭方内科医吉田長淑」（『石川郷土史学会々誌』8号、昭和50年）、片桐一男『蘭学、その江戸と北陸』（思文閣出版、平成7年）、沼田次郎『洋学』（吉川弘文館、平成8年）などがある。
- (2) 池田仁子（a）『金沢と加賀藩町場の生活文化』第3章（岩田書院、平成24年）、（b）「金子鶴村の蘭学と海外科学知識—化政期加賀藩蘭学受容の一側面—」（『日本歴史』698号、平成18年7月）、（c）「加賀藩蘭学と医者への動向」（『北陸史学』55号、平成18年）、（d）「大高元哲の事績をめぐって—加賀藩蘭学の受容と展開—」（加能地域史研究会『地域社会の歴史と人物』北國新聞社、平成20年）、（e）「医者と暮らしの諸相」（19世紀加賀藩「技術文化」研究会『時代に挑んだ科学者たち』北國新聞社、平成21年）など。
- (3) 池田仁子（a）「「寛文七年金沢図」等に見る医者への居住地と城内での医療」（『金沢城研究』8号、石川県金沢城調査研究所、平成22年）、（b）「加賀藩前期の医者と金沢城内での医療」（『同』9号、平成23年）、（c）「近世中期加賀藩の医者と金沢城内での医療」（『同』10号、平成24年）。
- (4) 文化期以降蘭学医者の諸活動が近代の西洋医学の底流となったことについては、池田仁子「近代学問の底流と育まれた人材」で詳しく紹介した（池田公一『石川県謎解き散歩』新人物往来社〈新人物文庫〉平成24年）。
- (5) 文化4年11月～同7年正月までの畑柳啓・同柳泰・宇田川玄真らによる前田治脩の治療、及び寛政期の荻野元凱・内藤宗安の診療などについては、前田育徳会『加賀藩史料』（以下『藩史料』と略記）10・11編、清文堂、昭和56年復刻にも収録されている。
- (6) 『藩史料』11編、866頁。
- (7) 荻野元凱については、京都府医師会『京都の医学史』思文閣出版、昭和55年、431・506・1285・1286頁。『国史大辞典』2巻、吉川弘文館、昭和55年、「荻野元凱」の項に依る。なお、右『京都の医学史』には、金沢出身の京都の町医者として天保期内科の山本周斎・瀧良輔の名が記されている（793・794頁）。また、荻野の入門帳「荻野元凱門下姓名録」は『京都の医学史』資料篇301～331頁所収。
- (8) 畑柳安・同柳啓・同柳泰については、前掲（7）『京都の医学史』772～776、1303・1304・1368・1369頁、『同』資料篇、234・498・547・548頁などに依る。
- (9) 池田仁子、前掲（2）（a）。
- (10) 池田仁子、前掲（2）（e）。
- (11) 吉川芳秋『蘭医学郷土文化史考』昭和35年、24頁。
- (12) 白崎家については、京都府医師会、前掲（7）資料篇、230・246頁、池田仁子、前掲（2）（c）も参照。
- (13) 池田仁子「加賀藩の蘭学と洋学」（金沢城研究調査室『よみがえる金沢城』（1）石川県教育委員会、平成18年）。
- (14) 「鶴村日記」は石川県図書館協会より6冊本として昭和51年・53年に刊行された。
- (15) 吉川芳秋、前掲（11）25～29頁。
- (16) 池田仁子、前掲（2）（d）。
- (17) 京都府医師会、前掲（7）資料篇、278頁。
- (18) 京都府医師会、前掲（7）資料篇、496・548頁など。
- (19) 津田進三「華岡青洲と加賀藩」（『石川郷土史学会々誌』3号、昭和45年11月）。池田仁子、前掲（2）（c）参照。

なお、春林軒の入門者については、以下同。

- (20) 延之助の治療と逝去、行状における「賢良公御夜話」「官私随筆」「本多政和覚書」は、『藩史料』14編にも収載。
- (21) 遠田元準については、前田土佐守家資料調査委員会『加賀藩年寄役 前田土佐守家文書目録』金沢市、平成13年、及び池田仁子、前掲(2)(a)・(e)。
- (22) 『藩史料』13編・14編。なお、本文中のスボイト及びジキターリスについては、青木歳幸「近世の西洋医学と医療」(新村拓『日本医療史』吉川弘文館、平成18年、157・166・167頁)に依る。
- (23) 池田仁子、前掲(2)(a)。
- (24) オランダへの前田家家譜と本草書については、『藩史料』4編に収録されているほか、近藤磐雄『加賀松雲公』中、明治42年、215～219頁、今井一良「前田綱紀購求「阿蘭陀国本草之書」考—重要箇所欠落の金沢大学医学部蔵本—」(『市史かなざわ』4号、平成10年、金沢市)などがある。
- (25) 『尊経閣文庫加越能文献書目』尊経閣文庫、昭和14年。
- (26) 沼田次郎・片桐一男『金沢藩壮猶館旧蔵蘭書目録稿』蘭学資料研究会研究報告96、昭和36年。池田仁子、前掲(2)(d)。
- (27) 水戸の徳川斉昭への蘭書の貸出しと斉泰の治療については、『藩史料』14編にも収録。また、天保13年の小林豊後守の金沢来訪と斉泰の診療、ジキリタス使用の詮議、御薬調合所の位置等については猪山直之の日記にも見える(石崎建治「加賀藩士猪山直之日記」(一)～(三)〈『金沢学院大学美術文化学部文化財学科文化財論考』3号、『同大学紀要文学・美術編』2号、『同』3号、平成15～17年〉)。
- (28) 吉川芳秋、前掲(11)23頁に「大庭養元」と記載されている。なお、このほか、同書に所収の吉田長淑の「門人籍」には、大高元哲・白崎玄正(以上、前述)・松原南岡(本多安房守家中医)・藤田弘菴(藩医)・白崎玄意(ママ、同)の名が見える。
- (29) 三浦孝次『加賀藩の秘薬』(石川県薬剤師協会、昭和42年)214・215頁。
- (30) 京都府医師会、前掲(7)1308・1359・1380頁、同、資料篇、508頁。
- (31) 『藩史料』11編にも収録されている。
- (32) 『御造営方日並記』上巻・下巻、金沢城研究調査室、平成16年・17年に刊行。
- (33) 『医家伝記資料』上巻、青史社、昭和55年。
- (34) 『石川県史 第貳巻』(石川県、昭和49年)所収侍帳。池田仁子、前掲(2)(d)。
- (35) 池田仁子、前掲(3)(a)。
- (36) 白峰旬「文化期金沢城二の丸再建工事期間中における労務管理に関する考察—『御造営方日並記』の内容分析から—」(『金沢城研究』7号、平成21年)。
- (37) 「荻野元凱門下姓名録」によれば、寛政3年、金沢の黒川元守(元亨カ、知常、22才)も荻野元凱に入門していることがわかる(京都府医師会、前掲(7)307頁)。また、黒川家の住居などについては、池田仁子、前掲(3)(a)・(c)。
- (38) 京都府医師会、前掲(7)733頁。
- (39) 池田仁子、前掲(2)(e)。
- (40) 天保5年の疫病と医師の派遣については、『藩史料』14編にも収載。
- (41) 橋本家文書(七尾市)「末世目覚草」(中島町史編集委員会『中島町史』石川県中島町役場、昭和41年にも収録)、堀井美里「学問と教育」(『新修 七尾市史 15 通史編』七尾市、平成24年、659頁)。なお、「末世目覚草」については、堀井美里・和田学の両氏より御教示を得た。
- (42) ・ (43) 池田仁子、前掲(2)(c)。
- (44) 池田仁子、前掲(2)(b)・(c)。
- (45) 青木歳幸、前掲(22)、151・152頁。

[付記]

本稿執筆にあたり、金沢城調査研究所の木越隆三・石野友康両氏に大変お世話になった。衷心より感謝申し上げる。